

歴史を見つめてきたキャンパスの植物

宣教師の思いが伝わる「西南遺産」

◆聖書植物園をながめる

C この鼎談では、西南学院92年の歴史の流れのなかで、キャンパスの草木と人々のかかわり、また、その思いといったものに注目してみたいと思います。

まず、現在、各位のご協力で運営している「聖書植物園」についてのお話からはいつていきたいと思います。これは大学の植物園ということですが、これも学院の歴史のなかに位置づけてお話ください。

A 大学構内の草木には、かなりの時を経た古いものもあると思いますが、新しいものも多い。また、野生もあるかもしれませんが、いろいろな方が好意で植えてこられたもの、近年になって聖書植物園の構想のもとに植えられたものもあるでしょう。

B 聖書植物園のパンフレットを見ますと、ざくろやイチジクのように日本人に身近なものもあれば、レンズマメやイナゴマメなど名前は知っているが実物を見るのは稀というものもあります。

C 大学図書館の玄関にあったパピルスの鉢植えが、今は6号館のほうに移植されました。パピルスの紙は茎を縦に削いで並べて接着し、貝などで叩いて作った。でもパピルスは紙だけではなく、燃料や食料にしたし、サンダルや籠も作ったんです。モーセがナイル川の葦の茂みに捨てられた場面もこの籠

が出てきます。鉢植えだと野生の印象がつかみにくいですがエジプトにあったことを思い浮かべてほしいですね。

A レンズマメは博物館に展示されています。ピンクがかっていて錠剤のような感じですね。原産はアジアで、聖地に伝わってポタージュとか病人の食餌にもなった。人々の生活に密着していたということですね。

B 聖書植物園は確かに珍しい植物を見ることができそうですが、散らばっていてわかりにくい感じが個人的にはしなくてもいい。探索が楽しいのかもしれない。キャンパス全部を使って、キャンパス＝植物園という構想であったと聞いていますから、これはこれでいいのかもしれませんがね。同窓会から寄贈された表示板は雨や埃で汚れているのでこの洗浄は定期的にしたほうがいい。

C ある先生がキャンパスにレバノン杉を植えたいとおっしゃっていました。

A 今、種から育った苗がコミュニティセンターの北側に仮植えされています。

C レバノン杉は4500年以上の歴史を持っていて、レバノンの国旗にもデザインされています。樹高が高く、硬く、まっすぐなため古代から材木のためにかなり伐採されていますよね。ピラミッドからもこれを使ったものが出てきているし、ガレー船¹の建造にも使ったとされています。レバノン杉はもと



東キャンパスのレバノン杉の苗木

もと高地の樹木で西南のような海拔ゼロ地帯では難しいと思っていましたが、現在では新宿御苑や京都府立植物園にもありますから、改良などされて生育しやすくなったのでしょうか。でも何といっても、今は数が少なくて貴重な樹です。

- B** 伐採が続いて今は絶滅寸前のようにです。成長も遅いし。西南に植えられたレバノン杉が、貫禄のある姿を見せるには数百年、1000年くらいかかるかもしれません。西南の未来もそのように長くあるべきでしょうけど。

◆記念の植樹

- C** 大きく育ったレバノン杉は見たいですね。ヒマラヤ杉ならキャンパスにたくさんあります。1917（大正6）年にドージャー先生がこの松原の地の購入を決められたときに写っている写真がありますね。先生が豆粒のように小さく写っています。シティ銀行の裏くらいの位置から撮ったものだと思いますが、松ばっかりですね。そして時代が下って1956（昭和31）年に創立40周年を記念して第一次緑化計画というのがあって、25万円、現代の200万円くら

いでしょうか、それでヒマラヤ杉やカイヅカなど150本ほどがチャペルの周辺、学生センターの付近に植えられました。図書館の裏にはクスが植えられたと記録されていますが今の図書館ではなく、旧図書館、今の学術研究所コミュニケーションプラザの裏ということになりますね。ちょっと確認してないのですが…。

- A** 学生の寄贈もありました。1955（昭和30）年度の短期大学部卒業生が1万円を募金して、チャペルの前にヒマラヤ杉十数本を寄贈しています。でも、このヒマラヤ杉の一部は、今度のチャペル解体の際、植替えではなく伐採されたようですね。
- B** 修猷館側の南側道路に沿って9本、角のほうに向かって両側に12、3本残っていますよ。
- C** 大学の緑化計画より学生の寄贈のほうが早かったのですか。それは悔しい。いずれにしても、キャンパスの樹木にそういういわれがあることはあまり知られていないようですね。もっと明確に表示や登録などをして、キャンパスの樹木一本一本、どうしたら保護できるか、十分に検討しないといけない気がします。
- B** 近年、キャンパスの整備が着々と進んでいますが、学院92年の歴史の中には、いろいろな方の思いがこめられたものがたくさんあります。建物も大切ですが、花はともかく、樹は建物よりもほとんどは長く生きるわけですから、学院の歴史の証人みたいな存在ですね。
- C** 1941（昭和16）年に学院創立25周年を記念して山地買収、植林の決議がなされたとありますが、その具体的な活

動というか実績に関する資料が少なく、今調べています。また、今回いろいろな方に、これらの樹木のいわれをお尋ねしました。よくご存知の方もいれば、ご記憶が薄れている方もおられました。それでも、キャンパスの草木には懐かしい思い出をお持ちなんです。そうなると、「いわれ」も大切ですが、お一人お一人の思い出ということも大切ですよね。あの花は今でも咲いていますかとか、あの樹は移植したようですが、今はどうなっていますか、という感慨深いお尋ねがありますから。

- B 草木はとにかく人の心に強く残りますよね。だから記念樹を植える。
- A 大学の施設環境整備のプロジェクトとして2002（平成14）年度にパーセントプログラムというのが発足しましたでしょ。芸術環境の充実のことで、学生や教職員の学園生活上の環境整備として、自然環境、樹木や庭園の整備充実も含まれていたと思いますが。
- C 建築費の0.5～1%を使うというシステムですね。庭園や草花にも適用されるそうですが、樹木はどうでしょう。

◆宣教師が植えた樹木

- B 先ほど、西南の地が松原であった話がありました。百道松原といってましたね。ここは当時「福岡県早良郡西新町大西」という所在表示で、「山林」「保安林」という記録があります。つまり松林ですね。だから、キャンパスの松以外の樹木は、その後の整備や寄付なんかで植えられたと…。
- C そうですね、話が前後しますが、今回の鼎談のきっかけを申し上げておきたいと思います。実は旧高等学校本館・講堂、今の大学博物館の東斜め前

に樹高15mほどの大木があります。この樹は、秋には葉が黄色に染まり、5月から6月にかけてチューリップによく似た花を咲かせますので、チューリップ・ツリーといえます。葉が半纏に似ているので半纏木（はんでんぼく）ともいい、またユリノキともいいます。北米原産で明治の初めに日本に渡来したといわれていますが、コミュニティセンター前の樹は、元高校長坪井正之先生のお話では、戦前の高等学部時代に元大学文学部教授アルマ・グレーヴス先生が植えられたのではないかとのことでした。坪井先生は、グレーヴス先生が植えているところを目撃したというのではないが、グレーヴス先生はいろいろ植えてあったので、そのように思われたらしいです。それが、口伝えてグレーヴス先生が植えたということになったのかもしれない。いろいろ思い当たる部署に寄贈などの



コミュニティセンター前のチューリップ・ツリー

記録があるかどうかを尋ねましたが、分かりませんでした。でも、もうこれはグレーブス先生が植えたということでしょう。福岡では、生の松原付近にチューリップ・ツリーがあったという話があり、それを聞いて採りに行かれたのかもしれない、と楽しい想像が広がります。



M.E. ドージャー先生

B グレーブス先生は1938（昭和13）年に西南に來られましたから、その直後に苗を植えられたとして、樹齢は約75～80年くらいでしょうか。

A 幹の直径が40cmほどありますからね。そのくらい経っていると思います。今は日本の各地にこの樹はありますが、西南にとっては残しておくべき「遺産」の一つとして大事にしておきたいものです。

C このツリーはシクモア・ツリー（シカモア・ツリー）ではないか、という声がありました。シカモアというトイチジクワ、スズカケノキ、プラタナスとかいわれていますね。イエスを一目見ようと背の低いザアカイがイチジクワに登った（ルカ19：4）と書かれています。チューリップ・ツリーは低い枝が少なくザアカイでなくても登りづらいです。だから、コミュニティーセンター前の樹はシカモア・ツリーではないですね。葉も違う。実はお尋ねした古澤啓子先生が九大の先生に鑑定をお願いされた結果なので間違いはないと思います。

A もうひとつ、宣教師の先生が寄贈された樹木があります。3号館と4号館の間の歩道に沿っている20本ほどの夾竹桃きょうちくとうです。盛夏に真っ赤な花をつけますね。本当に暑そうです。これはエドウィン B. ドージャー先生の奥様で宣教師であったメアリー E.

ドージャー先生が寄贈されたものだと思います。時期はエドウィン先生が1969年にお亡くなりになった翌年だったと思いますが、メアリー先生からの記念のようなものではなかったでしょうか。樹高は身の丈ほどでしたから37年でかなり大きくなりました。

B しっかり根付いて元気ですね。その表示などもぜひほしいですね。

A 宣教師の先生方には、学院の管理や運営、そして学生生徒を教育することにおいて、いつときでも安穩としたときはなかったと思います。特に戦時中は強制的に帰国させられてもいます。終戦後いち早く再来日され、本当に西南学院を愛してくださいました。これらの宣教師の先生方によって種が蒔かれ、苗が植えられた草木が、こんなに根を張り、枝を広げ、大きくなった、ということですね。

C キャンパスは今変革期ですが、キャンパスのあちこちにある記念物を壊さないような工夫が必要ですね。これらはいわば先ほどいわれたように「西南遺産」とでもいうべきものではないでしょうか。小さなキャンパスだからゆとりはないかもしれませんが、皆で知恵を出し合って西南学院の歴史にさらに彩りと感動を添えてほしいと思います。

（文責：学院史資料室 篠崎 珣）